
とある転生の光源収束（Light Gather）

ルーファス・ラヴィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生の光源収束 (Light Gather)

【Nコード】

N7638P

【作者名】

ルーファス・ラヴィー

【あらすじ】

科学と魔術と転生者が交わるとき、

「神にも等しい力の片鱗を振るう者」と「神が住む天界の片鱗を振るう者」と「神に違いし希望の片鱗の振るう者」が対峙するとき、

本当の戦いが始まる。

稚拙な文章ですが頑張ります！

科学サイドはほぼオリジナル、魔術サイドは原作基準です。
光の性質や誤字や文章に問題があった場合可能な限りなおしますの
でご報告してもらえると幸いです。
ただしこの作品に出てくる光の多くが普通の光ではないのでご了承
ください。
隔週更新を目指していますが学校が特殊なんで無理な場合はこれも
ご了承ください。

とある転生の光源収束 (Light Gather) (前書き)

初めまして。

二次小説は初めてですし、文才ないかもしれませんが、良かったら読んでください。

第1巻は原作をなくしてまして多少おかしいかも知れませんが目を瞑ってやってください。

とある転生の光源収束 (Light Gather)

「はあ、何でまた僕は性質の悪いスキルアウトに縁があるんだろうか、いつそのこと風紀委員ジャッジメントにでもなるかな」

一人の少年が茶髪の少女を囲っている3人のスキルアウトに向かって眠そうに言う。

「おい、こいつには俺たちが先に目つけたんだよ！それともあれか？やるってか？言つとくが俺たちは全員LEVEL3だぜ！そんなじよそこらの不良集団スキルアウトと一緒にするんじゃないやねえ！」

3人の不良が少年に襲いかかったが、

「悪いね、LEVEL3？そっちの方が性質悪いでしょ」

直後には3人も手に手錠をかけられ、ロープのようなものでぐるぐる巻きに去れて気を失っていた。

そして少年は携帯を取り出し電話をかけた。

「んつと警備員アンチスキルですか？今女の子を襲ってたスキルアウトが道路で寝てるんで引き取ってください。・・・またで悪かったですね、ではよろしくお願いしますね」

「ちよつとアンタ」

「ん？」

「LEVELは？」

(別に隠すほどじゃないけど面倒事は嫌だな)

「0だよ」

「へえ、そう」

直後雷撃の槍が少年を襲う。

しかし突如現れた白っぽく光るガラスのような壁に阻まれる。

「やっぱりアンタが新第3位ね」

「バカかっ！いきなり人に電撃ぶつけるか？普つ」

「そんなことはどうでも良いの！わたしと勝負しなさい！」

このとき少年はふと思った。

(最近当麻の不幸が移ってきたかも?)

しかしこの勝負は始まる前に終わりを向かえた。

「僕から半径2m以内にいる時点で負けだよ超電磁砲」
レールガン

超電磁砲こと御坂美琴の喉元に白っぽく光る西洋風の長剣が突きつけられる。

「なっ！」

美琴はそれを無視して剣をおろし大通りに向けて歩きかけた少年に向かつて・・・超電磁砲を放った。

が先ほどのガラスのような壁に阻まれて勢いを失う。が先ほどと違ったのはその壁がだいぶへこんでいたこと。

「おお！やるじゃん、5枚割れたよ。たぶん君より下の序列で5枚も割れる人間は・・・一人いたけど。じゃあね」

後ろで「次は負けないから！」とか「こんな能力だなんて聞いていないわよ！」聞こえていたが少年は聞き流しコンビニへの道を目指した。

がくえんとし
学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関でありその人口は230万人ほどであり、その8割が学生である。

その約230万人の中の一人の少年と、幾人かの主人公が活躍する物語。

とある転生の光源収束(Light Gather)

時は第4位超電磁砲と新第三位の光源収束の神楽蓮の邂逅から1ヶ月程前の7月20日。

神楽 蓮と純白のシスターは学園都市の高校1年生上条 当麻のペ
ランダにて発見される。

科学と魔術と転生者が交わるとき、

「神にも等しい力の片鱗を振るう者」と「神が住む天界の片鱗を振
るう者」と「神に違いし希望の片鱗の振るう者」が対峙するとき、

本当の戦いが始まる。

とある転生の光源収束 (Light Gather) (後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は転生の部分なんですけど短いので第一話も一緒に掲載したい
と思います。

ではまた来週

消失×能力×転生する者（前書き）

今回は出来が良くない気もするんですけど途中余裕が出来たら加筆したいと思います。まあ話上絶対必要ってわけでもないんで読み流してもらっても結構です。

消失×能力×転生する者

大木 佐奈、神楽 蓮の幼馴染にして初恋の人は6月20日にこの世界のどこからも消えた。

神楽 蓮の目の前で。

学校帰りに道端でふっと消えたのだ。

警察は行方不明として捜査を続けている。

そして今7月20日、蓮は死への一本道を下っていた。

気晴らしにと家族と出かけたキャンプで崖から足を滑らせ真っ逆さま。

数秒後、神楽 蓮の命の灯火は・・・消えた。

蓮が目覚めると真っ白な空間が広がっていた。

「天国・・・なのか」

すると目の前にいつの間にかいた老人は答えた。

「否、ここは何処でもない空間じゃよ、言うならば神のみぞ知る世界じゃな」

「DON?」

「・・・違っただけ言ったおこうか、大事な話がある」

「ん?何?危ない宗教団体か何かですか?」

「大木 佐奈を消したのは君じゃよ」

瞬間、蓮の頭が真っ白になった。

(・・・こいつ今何て・・・僕が佐奈をだって!)

「正確には飛ばした、と言うべきか」

「どういうことだよ！僕が何をしたらって言うんだ！」

「君の力はあの世界では過ぎた力だ、故に暴発を起こし有り得ない現象を引き起こした」

「そ、そんなことってっ！」

「一度飛ばされた者は元の世界には戻れない、が君を彼女が飛ばされた世界に飛ばすことなら不可能じゃない」

「え？それはどういう・・・」

「ただし条件がある。一つは彼女に会うまで記憶を失ってもらうこと、ただし経験のほうの記憶は残せるし、能力の使用方法も問題なしじゃ」

「能力？」

「言つたろ、君の世界では過ぎた力だ、でも彼女の飛ばされた世界では異常ではあるものの有り得ない程の物ではない」

「・・・一ついい？もしいかなと言つたら？」

「生きている状態で元の世界に帰そう」

この質問を聞かずとも蓮の答えは決まっていた。

「お願いします。佐奈のいる世界へ」

「そういうと思っていたよ、大変だろうけど頑張りなさい」

そして蓮の意識は落ちた。

邂逅×シスター×高校生

7月20日第七学区のとある学生寮に住むツンツン頭の高校生、上条 当麻はベランダにて啞然としていた。

その視線の先には二人の人間がベランダの手すりに引っかかっていた。

片方は純白の修道服に身を包んだ銀髪のシスター、片方はワイシャツに黒ズボンの普通の男子高校生に見えた。

そしてシスターは言った。

「おなかへった」

そして高校生は言った。

「ここは、どこ？というより僕は誰？」

上条当麻の不幸が始まりの鐘を告げた。

そしてすったもんだの挙句数分後、

「・・・要するにそっちのシスターはインデックスって名前で魔術結社キャバルに追われる身で、高校生のほうは神楽 蓮と言う名前しか覚えてない」と

噛まれた腕を冷やしながら当麻は言った。

「まあ覚えてないって言うより思い出せないかな」

「おなかへったんだよ」

「おい！人の腕ごと焼きそばパン食つといてなんだ！そもそも！魔術結社って何だよ！この学園都市で魔術はないだろ、更にインデックスは偽名だろ！」

「確かに正式名称は Index - Librorum - Prohibitorium だけどね。魔術は存在するんだよ。私は完全記憶が出来るからんだけど、私の頭の中には10万3000冊の魔道書が入ってるんだよ」

「ん〜僕は記憶がないけど魔術は有り得ないんじゃないかな？常識的に」

「そんなことないもん！」

「ほお〜そうかじゃあ俺の前で証明して見せるよ」

それを聞いたインデックスは台所から包丁をもって来て当麻に突きつけた。

「っておい！すみませんでした！謝るから」

「違うんだよ、私は魔術は使えないけどこの修道服は歩く教会って言う教会として必要な魔術的要素だけ詰め込んだ服の形をした教会なんだよ。包丁で刺したぐらいじゃ、びくともしないんだよ。ほら背中刺してみて」

「いやそんなことしたら」

「そうか・インデックスこの右手はなイマジン・プレイヤー幻想殺しつってなそれが異能の力なら神の奇跡でも打ち消せる、お前の話が本当なら右手で触ればそいつは木っ端微塵に吹っ飛ぶってわけだな？」

「君の力がほ・ん・と・う・な・ら・ね？」

インデックスは明らかに疑ってるような目つきで棒読みする。

「ほお〜、やってやるうじゃねえか！」

「ねえ二人とも落ち着いてね？」

蓮の努力？むなく、当麻の右手が修道服に触れる。

そして・・・何も起こらない。

「ほら見る！何もおきてねーじゃねーか！」

「君のほうこそ幻想殺しなんてウソつぱちなんじゃない！」

直後バサツと音がして、修道服が床に落ちた。

「……」

そしてインデックスは当麻の腕に噛みついた。

「ぎゃああ！！！」

「全くいきなり噛みつくか！半分は俺が悪いけどさ」

インデックスは落ちて形の戻らない修道服ぬのきねに安全ピンで止めようと

必死で答えない。

「あの服はきつくない？」

蓮はインデックスに声をかけ今作った修道服を渡す。

「何だ？どっから持ってきたんだ？その修道服？」

当麻の問いに蓮は答える。

「能力？」

「なんで疑問系、って記憶喪失か」

「うん、能力については覚えてるみたい」

「この修道服貰ってもいい？」

「あ、もちろん強度もそれなりにあるよ」

インデックスは修道服を着る。

（能力を覚えているのか？なら記憶の手がかりになるかも）

「LEVELは覚えているか？」

（何の能力が分からなかったが一瞬であれをやったなら高いはずだよな？）

「ん」

「ん」忘れた、けど能力名は光源収束だよライト・ゲイザー

（それって・・・）

「お前！それLEVEL5じゃねーか！しかも第三位だぞ！」

「と言われてもどのくらい凄いかわかんない」

「二三〇万の上から三番目だぞ」

『ムムムッ…』

「あ、やべえ！補習だ！蓮の方は後で警備員アンチスキルにでも連れられてやるよ、俺学校いくけど二人はどうする？」

慌てて準備しだした当麻は携帯を踏んで壊す。

「あつ！不幸だ・・・」

「不幸って言うよりドジなだけかも？」

インデックスは諭すような声で言う。

「僕はまあここで留守番でもしてるよ」警備員アンチスキルってとこで僕の家と

「分かるんでしょ？」

「ああ、多分な。インデックスお前はどうすっておい！どこ行くんだ？」

当麻は玄関を出かけていたインデックスを呼び止める。

「追われてるんだろ？だったら放って置けないだろ」

「それは僕も同感だね。行きたいところがあるんなら護衛にでもなるよ」

二人の声にインデックスは答える。

「じゃあ地獄の底までついて来てくれる？」

それに二人は答えられない。

「大丈夫！教会まで行けば匿ってもらえるから」

そういつて寂しそうな笑顔で走り出そうとするインデックスの手を蓮は掴んだ。

「だったら教会までついて行けばいい話だね。別に教会が地獄って訳じゃないんでしょ」

それに当麻は、

「そもそも学園都市の外だろ、教会って。だったら少し家で休んでから連れて行ってやるし、ずっとここにいてもいいぞ」

「でも・・・いつ魔術師が襲ってくるか分かんないんだよ」

「俺の右手は異能の力を打ち消すんだ、忘れたか？魔術だって例外じゃないさ」

「僕もしばらくここにいとするとするよ、第三位って学園都市では相当強いんでしょ？」

「ああビリビリより・・・いやとにかく強いはずだぜ」

「じゃあ決まりかな。あ、食費は後で当麻に返すってことで貸しにして」

「OK、補習行ってる間はインデックスのこと頼むぜ、留年はさすがにヤバイからさ」

「了解、任せて」

「あの～私を無視して話を進めてない？」

「とにかく！俺が帰ってくるまで部屋の中に戻ってる、いいな？」

こうして奇妙な同居が始まった。

邂逅×シスター×高校生（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
次回は神裂登場です。
ではまた来週

同居×記憶×悲しい魔術師（前書き）

今回はサブタイトルで迷いました。

あと神裂って変換で出ないから打ち難かったです。

では、どござい

同居×記憶×悲しい魔術師

三人の同居生活が始まってから三日間、魔術師が襲ってくることもなく平和なときが過ぎた。

寝床に関しては、インデックスはベッド、他2名床で寝ることになった。

当麻は風呂場で寝ることを推奨したが二人分のスペースはなく、何かあったらお互いぶっ飛ばせばいいという蓮の一言で座布団を枕に薄い毛布をかけて過ごした。

食事はインデックス、当麻、蓮で8:3:2の割合の量を食べるというシユールなことだったし当麻は不幸だ！と何度も言っていたがそんな平穏な日が続いていた。

しかし今当麻たちは魔術師とは違う新たな危機に面していた。

「何だ？CPUがいかれちまったかな？」

まあなんてことはなく、ただ上条家の風呂は壊れていた。

電源は付いているように見えるけどまったく動かない。

「僕も機械については詳しくないしな、カメラとかなら分かるんだけど何故かね」

気だるそうにそう言った蓮は相変わらず夏休みだし別に学校もないからと言って未だに警備員アンチスキルにも行かず同居している。

「どうするの？お風呂」

大食らいのシスター、インデックスは当然の疑問を口にした。

「今から電話してもどうせ修理屋はすぐ来ないから銭湯行こうか」

「え？銭湯！！」

インデックスは目を輝かせた。

「銭湯か？僕も初めてかな？覚えてないけど」

そんなわけで第七学区の大通り。

「銭湯 銭湯」

「そんなに嬉しいのか？」

とてもご満悦なインデックスに当麻が訊く。

「うん」

「銭湯くらい行く機会あったんじゃない？」

蓮が聞くと、

「私さ日本こっに来たの1年ぐらい前なんだ」

「そーなのか？」

当麻が相槌を入れる。

「それ以前の記憶は失くしちゃってるからね」

「じゃあ僕と一緒に」

「うん、それでね気付いたら一人っきりで自分の名前も思い出せないのに、禁書目録インデックスとか魔術師とか、そんな知識ばかり頭の中をめぐって怖かった。でもね、今は当麻と蓮といれて幸せだよ！」

そういつてインデックスは駆け出す。

しかしそんな微笑ましい光景は長く続かなかつた。

インデックスを追いかけようとした時当麻は疑問に思った。

（この時間大通りに誰もいない？）

三人以外誰一人としてそのとおりに人はいなかった。

当麻は叫ぶ。

「戻れ！インデックス！」

しかしその声はインデックスには届かない。

「もう一人の魔術師がルーンを刻んでいるだけですよ」

後ろからした声に二人が振り返ると、長い髪をポニーテールに括り、

Tシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、

腰のウエスタンベルトには長刀をかけた女性が二人の後ろにいた。

「当麻はインデックスを追いかけて、もう一人いるらしいからね。」

「こっちは僕が相手する」

「任せていいか？」

「余裕だよ」

当麻は走り出す、インデックスの元へ。

「行かせていいの？」

蓮は当然の疑問を口にする。

「問題ありません、ステイルはただの高校生に負けるようなことはありませんから」

「そっか」

「はい、私は神裂火織と申します。単刀直入に申しますと――もう一つの名前（魔法名）を名乗る前に彼女を保護させていたいただきたいのですが」

「何故？」

「彼女の持つ10万3000冊はそれだけ危険と言うことです」

「嫌だと言ったら？」

「仕方ありません、実力行使ということでは」

「それが一番手っ取り早そうだね」

蓮がそう言ったと同時に神裂は刀に手をかけた、直後7つの斬撃が蓮を襲う。

（幻術の一種か、刀に注目をさせ意識の外の部分に7本の針金をもつて行き敵を斬り裂くねえ）

蓮は目の前に白っぽく光るガラスのような小さな正方形の壁を7箇所発生させ7本とも止める。

「僕相手に目の錯覚みたいなものは効かないよ。光を操るのは僕の専売特許みたいだね」

ライト・ゲイザー
光源収束

光に質量を持たせて操る能力、光の速さのスカラー量は変わらない

ので、速度のベクトル量のみ操作可。
ただし半径2 m以上離れると、演算が遥かに難易度をまし時間もかかる。

能力名は研究所が上から言われてつけた名前とその本質でなく、太陽光を一点に集める技の一つ光源収束ライト・ゲイザーからとつてある。

質量を持たせた光は動きが止まり、この状態の光は操作出来ないが武器や防壁として使える。理論上これより硬い物質は存在しないが衝撃にはそこまで強くない。

入力した質量が1平方メートル1 ng以下のときから速度を持ち(1 ngのとき時速1080 m秒速0.3 m)方向を操れる。

この際質量と速度は反比例し最初に記述した物でなくある程度光として振る舞うものとなる。

彼が主に使うのは、

光への質量を最大にして320枚にも重ねて作る防壁。

時間短縮のために320枚に制限し、強化ガラスの技術の模倣。

320枚という数字の理由は暑さ約1ミリメートルの光の壁に光の壁より硬いものが音速の10倍で突っ込んできたとき防げるぎりぎりの数だからである。

光にかすかな質量を持たせ体に纏い操り光速移動するもの。

体への負荷がかかるので多用は出来ず、速度にも限度がある。

ある程度の質量を持たせ(1 ng以下)対象物にぶつける光線なども存在する。

「さすがLEVEL5と言ったところですか・・・」

「へえ僕的能力を知ってるんだ？でもそれは知らないと同義かな？」

悲しいほど優しい魔術師と記憶喪失の超能力者の勝負が幕を開ける。

同居×記憶×悲しい魔術師（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は神楽 蓮VS神裂 火織です。

ではまた来週

神裂×神楽×科学の真実

「光を自在に操るだけの能力と聞いていたのですが七閃が効かないのでは仕方ありませんね、救われぬ者に救いの手を（Salver e000）！」

名乗った瞬間一気に神裂は蓮との距離を縮める。

（速いな、でも追いつけないレベルじゃない）

体に光を纏わせ光で作ったナイフを所々に配置しながら後ろに下がっていくが神裂は全てを避けた上で蓮に追いついてくる。

（やばいな、一か八か閉じ込めるか）

半径2mという限られた範囲でしか使えない蓮は光を硬化して貫くことも考えたが避けられる可能性が高いので出来ないと判断し動きを止める。

そこに神裂が突っ込んでくるが2m範囲に入った瞬間檻をつくって閉じ込める。

「よし、これで、げっ！」

「唯閃！」

たった一回の抜刀で一瞬で檻は木っ端微塵となる。

「さて小細工は通用しないみたいですので、こちらは直接唯閃でいきます、死なないことを祈りますよ」

（やばいな320枚で防ぎきれるかな？見たところ唯閃は反動が大きい技みたいだし止めれば一瞬とはいえ隙があるよな。夕方なのが痛いけど逆に殺さないって意味では丁度良いな。）

蓮は体から力を抜く。自然な戦闘体制になる。

（やたら僕の体は喧嘩慣れしてるみたいだな）

「こつちも次は本気でいくよ」

神裂が突っ込んで抜刀する、瞬間320枚の光の壁が出現し貫かれる。抜刀自体は反応できる速度ではないが289枚貫かれた瞬間速度が少し鈍った。

「いける」

蓮は神裂の上に飛び閃光を放つ。1 a g / 平方メートルアットの質量を持った太陽光が限りなく光に近い速度で真上から降り注ぐ。

あたりにアスファルトが飛び散る。

そしてアスファルトの霧が晴れたところに神裂は立っていた。

「げ！立ってるよアレ食らって。普通の人間ならとつくに死んでるんだけど」

（まああの速度で動いて大丈夫なら普通じゃないよな）

「私は・・・イン、デックスを守らなくてはならない、のです。この程度では、やられません」

「・・・いつちゃ何だけど僕と当麻は貴方とステイルって人を合わせたより数段強いよ」

「そういう、問題じゃないのです。彼女は完全記憶が出来る人間であり、10万3000冊もの魔道書を持っています」

「ちよつと待って、なんで貴方が事情について説明できるんだ？」

「・・・彼女は私の同僚であり親友でした。必要悪ネセザリウスの教会のね」

（親友ね・・・まあ1年前から記憶がないとは言ってたよな）

「で？続きは？」

「彼女の記憶の85パーセントは10万3000冊の魔道書で埋められて、

残りの15パーセントでは完全記憶能力者であるインデックスは1年づつ記憶を消してやらないとパンクしてしまうというわけです。

期限は後3日です」

蓮の頭はおかしくなった。無力感によるものではない、怒りによつて。

「それで何度も記憶を消したのか？」

「ええ彼女のためにはそうするしかね」

「ふざけんじゃねえ！お前にその話をした奴は嘘つきか、ただの馬鹿だよ！人の記憶がパンクするなんてことはまず有り得ない。

そもそも知識の記憶をどんなに詰め込んだところで思い出のほうの

記憶が圧迫されるなんてことは絶対に有り得ないんだよ。

人間の脳は記憶するにもエピソード記憶、意味記憶、手続き記憶とか独立した記憶を持っているんだよ。こんなのちよっと調べれば分かることだし病院に行つて言われたなら、その医者は医師免許剥奪どころか潜りですらねえよ！」

「そんなはずは、だって……っ！」

「嘘じゃないのはおまえ自身が一番分かってんじゃないの？インデックスが記憶を消され続ける理由ならいくらでもあるんだろ？」

実際神裂には思い当たることがあった。

ピーク・ショツプ
（最大主教！）

「ただ科学側で治療出来ないようではないと思うよ、僕も記憶喪失だから断言は出来ないけどね」

「彼女の頭通に気付いていましたか。インデックスは記憶を抜き取る前に頭通などの症状が出てその後熱にうなされます。でもそれは魔術側のものが原因でしょうからね」

「で、どうする？」

「一旦イギリスに帰ってから……」

「却下」

（そんなことしたら丸め込まれるか殺されるかだろ）

「でも科学側に治療法はないと言いましたよね？だったらそうするしかないでしょう」

確かに魔術によって制約をかけられているインデックスを科学側から治療は出来ない。

（魔術による制約ね……）

「訂正、一人だけ何とかするやつがいた」

「それは、誰ですか！」

「上条 当麻だよ、インデックスを追いかけて行ったもう一人の高校生」

超能力者と魔術師はインデックスのいる方に走り出した。

無意味な戦いを止めるために。

神裂×神楽×科学の真実（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は上条 当麻VSステイルII マグヌスです。

ではまた来週

神父×少年×魔女狩りの王（前書き）

第1巻も終わりが近づいてきました。

未だに原作は見つかからないけれど頑張って行きます。

神父×少年×魔女狩りの王

第七学区のある倉庫の中にインデックスが連れ去られるのを見た当麻は、

当麻は倉庫の中に入ってインデックスと身長2mの肩まで届く赤い長髪、耳に着けた大量のピアス、右目の下に彫られたバーコードの刺青をした神父の姿を見つける。

「インデックス！」

インデックスに向かって走り出すが、

「我が名が最強である理由をここに証明する（Fortis931）！」

—世界を構築する五大元素の一つ偉大なる始まりの炎よ（MTWOTFFTOIIGIOIF）

—それは生命を育む恵みの光にして邪悪を罰する裁きの光なり（IBOLAIIOE）

—それは穏やかな幸福を満たすと同時冷たき闇を滅する凍える不幸なり（IMHAIBOD）

—その名は炎その役は剣（INFIMS）

—顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ICRMBGP）

殺れ！^{インケンティウス}魔女狩りの王！」

真紅に燃え盛る炎の中に、重油のような黒くドロドロした人間の力タチをしたモノが芯になっているものが当麻を襲う。

そして当麻は炎に包まれる。

「油断大敵だっけ、最初から本気で行かせてもらったよ。ご苦労様、残念だったね、でもインデックスに一直線で駆け寄ったことは認めよう」

「だーれが、ご苦労様だっけ？」

イノケンティウス
魔女狩りの王がかき消され当麻が走り出す。

イノケンティウス
が再び復活した魔女狩りの王に襲われる。

「くそっ！消した直後に復活するのか！」

イノケンティウス
「どんな理屈かは知らないけど無駄だね、魔女狩りの王の前では無に等しいね」

当麻は右手で応戦するが少しづつ押される。

(熱い！どうすれば)

「とう・ま！ルーンを！紙に貼ってある文字をなん、とかすれば」
当麻に向かって今にも倒れそうなインデックスが叫んだ。そしてインデックスは床に崩れ落ちる。

「おい！てめえインデックスに何をした！」

「なんだい？僕の名前はステイル・マグヌスだよ。そして答える必要性を感じないね」

(速く倒すしかないか、でも)

倉庫の壁は変な文字でかかれた紙で覆いつくされていた。

(こんなのどうすりゃ・・・)

イノケンティウス
当麻は魔女狩りの王から後ろにジャンプし落ちている紙を一枚手に取る。

(黒インクにプリンタ用紙・・・こんなのでアレが動いてるのか、待てよインクか！)

思い立ったように当麻は倉庫の入り口に向かって走り出す。

「なんだい？逃げるのかい？そんな程度の覚悟か」

イノケンティウス
入り口に着いた当麻直後魔女狩りの王が牙をむく。

それを当麻は右手で一瞬止め言い放った。

「参ったぜ、あんたスゲエよ。これがコピー用紙じゃなかったら俺の負けだったよ」

当麻は左手でそこにあつたスイッチを押した。

天井から大量の水が降ってくる。

「あはははは！何を言い出すかと思えば！摂氏3000度の炎だよ

この程度で消えるはずがない、それにコピー用紙だって濡れたくらいじゃ駄目にはならないよ」

そして魔女狩りの王が当麻を襲う、そして当麻は右手を出して打ち消し魔女狩りの王は、再生せずに崩れ去った。

「イ・・・イノケンティウス？」

「紙は消えなくても、インクは落ちるんじゃないのか？」

「そんな・・・」

「なんでインデックスを襲った？インデックスに何をした？」

「何もしてないさ。理由は彼女の保護さ」

「保護？何もしてない？じゃあなんでインデックスは苦しんでるんだよ！」

当麻の視線の先にはうなされているインデックスがいた。

「それに関しては私が答えましょうか」

「何とか間に合ったかな？」

そして倉庫の入り口には神裂と神楽が立っていた。

神父×少年×魔女狩りの王（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
来週から定期テストなのでちょっと書けないので来週は主人公紹介
を載せておきます。すみません。

主人公紹介（前書き）

2月1日、初期投稿

主人公紹介

神楽 蓮 Kagura Ren

LEVEL 5 序列第3位

身体能力は同学年の男子の平均を大きく上回る。
少人数のスキルアウトなら能力なしで渡り合える。
容姿はD - からA + まででA - 位ので中性的な顔立ち。

能力名 光源収束 (Light Gather)

光に質量を持たせて操る能力、光の速さのスカラー量は変わらないので、速度のベクトル量のみ操作可。
ただし半径2 m以上からは、演算が遥かに難易度をまし時間もかかる。

能力名は研究所が上から言われてつけた名前ライト・ゲイザーでその本質でなく、太陽光を一点に集める技の一つ光源収束からとってある。

質量を持った光は、

原子崩しでも破壊出来ない結びつきを持ち、

超電磁砲の衝撃や熱には耐え切れないものの複数枚重ね合わせて強化ガラスのようにすれば十分防御可能。

質量を持たせた光は動きが止まりこの状態の光は操作出来ないが武器として使える。

入力した質量が1平方メートル1 ng以下のときから速度を持ち (1 ngのとき時速1080 m秒速0.3 m) 方向を操れる。

この際質量と速度は比例し先に記述した物でなくある程度光として

振る舞うものとなる。

終息×収束×幻想殺し（前書き）

いよいよ第一巻もこの話を含め後2話となりました。

一巻が終わったなら、未次元物質編を考えていますが時系列を考えると微妙になってしまっんで考え中です。

なお未次元物質編からは垣根帝督が登場し、彼の戦う理由についても触れていきますが、原作とはかけ離れて行きますがあしからず。

終息×収束×幻想殺し

神裂と蓮は当麻にインデックスの症状、1年間の制約の嘘の理由について、二人の魔術師がインデックスの同僚であり親友でもあったことを説明した。

「で、当麻の右手でインデックスに掛かっている魔術を壊して欲しいってわけ」

蓮がいつになく真剣に言う。

「けどさ、俺はインデックスの体に触れたけど何も変わってないよな」

「それに関しては喉の奥に術式があると推測します」

「・・・そうだね、確かに頭に近くて誰にも見られずに術式を書き込めるからね」

二人の魔術師は言う。

それを聞いた当麻はインデックスの口を開けて魔方陣のようなものを見つける。

「これに触ればいいんだな」

そう言っただ麻はインデックスの喉に触れた。

バギン！と。当麻の右手とそれに伴う体が勢い良く後ろへ吹き飛ばされた。

「警告、第三章第二節、Index - Librorum - Prohibitorium 禁書目録の『首輪』、第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備・・・失敗。

『首輪』の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の保護のため、侵入者の迎撃を優先します。『書庫』内の十万三千冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算・・・失敗。

該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定^{口イカル}魔術^{ウエボン}を組み上げます」

インデックスの無機質な声が響く。

「侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

インデックスの両目から魔方陣のようなものが放たれ当麻に近づき、
・・爆発した。

「うわぁ！」

当麻は叫び声を上げ右手を突き出して消してやむなきを得るが続いて光の矢が当麻を襲う。

その光は一本の刀によって引き裂かれる。

「こうなつたからには仕方ありません！全員で上条当麻をインデックスまでつなぎます！Salver000！」

神裂が叫ぶ。

「全く、まあそれでこの子が助かるなら文句はないさ！Fortiss931！」

ステイルがぼやく。

「当麻！後ろは任せろ、頑張れ！」
蓮がエールを送る。

（行ける！4m、たった4mでインデックは助かるんだ。この右手で救えるんだ！！）

当麻はインデックスに向かって走り出す。

「敵兵、上条当麻を最も難度の高い敵とし最優先で破壊します」
当麻に向かって放たれた光の柱は蓮の放った超電磁砲をも凌駕する一撃で吹っ飛び、

光の羽は神裂の七閃と魔女狩りの王に阻まれる。
真正面からの光は右手で打ち消しながら進んで行く。

「気を付けてください！その羽に生身の体で触れてはいけません！」

あと3 m。

「上条当麻の破壊において他の敵兵3名を破壊しない限り不可能とし、神楽 蓮の撃破を最優先とします」

当麻への攻撃が一時弱まり蓮に向かって大量の光の矢が降り注ぐ。

「いやいや、僕に光は効かないってのにな」

光の矢は全て霧散する。

あと2 m。

「敵兵、神楽 蓮の破壊不可を確認、敵兵ステイル＝マグヌスの破壊を最優先に変更します」

ステイルに向かって光の矢が放たれるがたどり着く前に蓮によって霧散する。

「礼は言わないぞ」

「別にいいよ、余裕だし」

実際にはステイルと蓮の距離自体は2 m以上あり彼の能力の対象外だが、

光の通り道に半径2 mを掠ったので光の矢の霧散に成功した。

あと1 m

「現状打破への思考中・・・失敗。これより思考回路の全てを防衛魔術へと変更します」

一層攻撃が激しくなるが上条 当麻は止まらない。

3人の魔術師と超能力者の援護を受け右手がインデックスの喉に・・・
・・・届いた。

直後神裂が叫ぶ。

「上条当麻！危ない！」

光の羽が当麻の頭上1m程から落下し続けていた。だが当麻はたどり着くまでの怪我也大きく咄嗟に反応出来ない。

突然あと10cmかと言うところで光の羽は結晶のようなものに包まれて床に落ちた。

実際には蓮が周りの光を結晶化させたのだが。

「全く、遠距離からの演算は疲れるんだぞ！」

そしてインデックスは床に崩れ落ちようとしたが当麻が抱き止める。

「良かったな、インデックス！お前助かったんだぞ！」

「ん、と、うま？あのね、私、おなかへった！」

こうして事件は終息を向かえた。

終息×収束×幻想殺し（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は一卷部分のエピローグになります。

ではまた来週

終幕×不安×始まる物語（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。

これからの予定は活動報告に書かせてもらいました。

今回は原作一巻部分のエピローグを書き忘れていたのでどうぞ。

終幕×不安×始まる物語

「もう少しだけ、当麻の家に居てもいい？」

インデックス救出劇の後、当麻は病院に運ばれた。

そして集中治療室入れられていて数時間後、一般病棟の個室に戻ったことをカエル顔の医者に聞き、当麻の部屋に入った時の第一声はこれだった。

実際、僕は有名人らしく第三位は長点上機の光源収束ライト・ゲイザーというのが通り名になってるらしいのだけど、

自宅について警備員アンチスキルに聞けばいいとのことだったのだが、踏ん切りがつかなくて夏休みでもあるしと自分に言い聞かせ不安を押し隠すようにして当麻に聞いた。

「全く問題ないぜ、蓮は命の恩人だし何より友達だからな」

僕はそんなに捻くれた性格だとは思わないけど、

目の前の友人ほど真っ直ぐな人間だとも思えないなあ。

「ありがと、とりあえず当麻が退院して落ち着くまでお世話になるけどいい？」

「分かった、インデックスのことは頼むな」

そう当麻が言った直後、噂をすればんとやら、インデックスが病室に入ってきた。

「とうまのばか、なんで私のためにあんな無茶やらかしたの！」

そう言つてインデックスは当麻の頭に噛み付いた、もちろん比喩的な表現でなく。

「ちょインデックス、痛い、痛いよギブアップ！」

数秒間噛んで満足したのかインデックスは僕のことには気が付き？怒られた。

「まったく、とうまもそうだけど、れんもあんまり無理ちゃだめだよ」

「おいインデックス、上条さんと蓮の扱いがあまりにも違いすぎる

のではないでせうか？」

「当麻は死にかけたから仕方ないよ」

「また噛まれたいの？」

「ちよつと待った、噛まれたいのって言いながら噛んでんじゃねえか、ちくしょー不幸だああああ！」

もう少し、もう少しだけ自分が記憶喪失でないと錯覚できるこの空間にいても罰は当たらないと思う。

いつまでも逃げるつもりもないけど、夏休みが終わればどのみち僕の知らない知人や家のことも分かるだろうし。

蓮がそんな感傷に浸っていた頃、学園都市外に続くの検問近くで、露出の高い服を着た女性と黒い修道服に身を包んだ青年、

神裂火織とステイル「マグヌスは何度も繰り返されたであろう会話をしていた。

「本当にインデックスに会いに行かなくてもいいのですか？」

「会いたいなら一人で会いに行けばいいだろ？僕は行くつもりは全く無いけどね」

「私は彼女がこれからここで暮らしてていくように上で決められた以上、余計な負担になりたくはないですから行きません」

「そんな会いに行きたいオーラだしながらやせ我慢するもんじゃないんじゃないか？」

「私以上に彼女に会いたいと思っているのはステイルの方では？」

「そんなことはない、別に彼女のことは親友だった関係以上でも以下でもなくて」

「聞いてないことにまで答えてもらわなくて結構です、学園都市外まであと少しです。さっさと帰りましょう」

「最初からそうするつもりだったんだ。わざわざ言葉にするまでもないね」

それからは互いに無言で二人の魔術師は学園都市を後にした。

一人の超能力者によつて微妙に変えられた筋書きは、
未来から見るととても小さなものであったが、それでも確かな変化
であつた。

転生者と主人公^{ヒーロー}が交差したとき、
本来存在し得ない物語の幕が切つて落とされた。

終幕×不安×始まる物語（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。

夏休みなのでそこまで亀更新にはならないと思いますが、各話の見直しと原作の確認もあるので次がいつとははつきり言えませんが、

というわけでまた後日。

スペア×パラレル×最悪の出会い（前書き）

お待たせしました。

これからは二週間に最低一話、出来る限り隔週でやっていきますが、どうぞ温かい目で見てください。

では未元物質編スタートです。

スベア×パラレル×最悪の出会い

あのインデックスと魔術師の事件から2週間と少し後の8月10日、^{アンチスキル}警備員の人に家や学園都市について教えてもらうことに成功した僕は、

ついに我が家（覚えてないけど）に帰ってきた。

実は君は風紀委員^{ジャッジメント}の一員だったなんて騒動もあったけどここでは割愛するってことで。一応風紀委員（ジャッジメントの方は休業中）でことにしてもらってはいる。実際は働かされたけどね・・・
と現実逃避してる場合じゃなかった。

「広いな」

思わず独り言をつぶやいてしまう程広かった我が家に動揺を隠しきれず、

本当に今までここに住んでいたのかどうかかなり怪しかいと感じた。高層マンションの最上階で部屋が幾つもある。

これはLEVEL5という身分だとしても豪華すぎるだろ。

リビングにソファーを見つけ座ろうとした時、ドアの開く音を聞いた。

「おい、お前誰だ？」

えらいイケメンの金髪が言い放った。

「オーケー、住居侵入罪で風紀委員^{ジャッジメント}まで行こうか」

そう言つとイケメン（金髪）が真面目な顔をして言った。

「止めておけ、通報でもしてみろ、お前俺に殺されるぞ」
相当腕に自信があるらしい。

と言う訳で電話をポケットから出そうとした瞬間、
イケメン（金髪）から羽が生えて襲ってきて吹っ飛ばされた。
修復し続ける光の壁がそれと伴う突風を320枚の壁が直接体には
触れさせないが、
あの火力はまずい。当たったら即死だ。まあ当たらなきゃ良いだけ
なんだけど。

「ちっ！高位能力者か」

全くそれはコッチの台詞だろ、

しかし序列一個上の未元物質ダークマターの垣根帝督だったとはね、狭い世の中
だね。

「先に言っておくよ、ジャッジメント風紀委員の光源収束こと神楽蓮だ、大人しく
捕まってる貰うよ」

蓮が手を振り上げた直後、質量を持った光が垣根の服と肌が10箇所ほど引き裂く。

勿論深すぎない程度に。

「流石に音速を超えてる攻撃は避けられないよね」

「俺の未元物質ダークマターに常識は通用しねえんだよ」

6枚の羽が一斉に襲ってくる。・・・メルヘンな能力だことで。

「いやいや僕の光は常識の範疇にないよ、それにその羽から出てる
殺人光線っぽい反射したらどうなるかな？」

この言葉が止めだった。

もともと一撃も攻撃の通らない垣根の心を折るには十分だったと、
この時は思っていた。

「ちっ！ここは一旦退くか」

「げ！に、逃げるなあ！」

壁ごとぶち壊して垣根は飛んで行ってしまった。

「はあ、遠距離（2m以上）の捕縛が出来ないのが痛いな、まああの羽と近距離戦繰り広げるのも嫌だけど」

さて警備員アンチスキルに電話をかけとくか。

「あ、黄泉川さん？えつと今家なんですけど、不法侵入、器物破損、能力不正使用・・・後公務執行妨害を取り逃がしました」

『それはどうということじゃんよ？』

「第二位にやられました、まあ最後の以外は申告罪ですし、どうでも良いですけど、手続きお願いします」

『・・・分かったじゃん、すぐ行くじゃんよ』

「はあ、不幸だ」

壁に大きく空いた穴を見て、そう呟く蓮だった。

とある窓のないビルの一室で男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも凶人にも見える、

学園都市総統括理事長アレイスター・クロウリーは予想外の人物の出現に対しての対策を考えていた。

メインプラン第一候補と同等の力を持ち、スベアプラン第二候補とも完全に異なる、差し詰めバラレルプラン第零候補と言ったところか。

しかし腑に落ちないのは、あれは確かに存在しなかったはずの能力だと言うことだ。

あれ程の力をプランに組み込まないどころか、無視するなどには有り得ない。

しかし最初から存在していたとしか考えることは出来ない。

バンク書庫だけでなく、アンダーライン滞空回線にまで手を加えることは不可能だ。例え魔術であっても科学であっても。

しかしプランに問題はない。ならばそれだけのことか。

ここまで僅か1秒の出来事であった。

スペア×パラレル×最悪の出会い（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
次回は垣根君メインになります。
では、また来週。

暗部×暗闇×暗すぎる世界（前書き）

今回はシリアスというか人が死にます。

暗部ってのはそういう世界なんです。

一応読まなくても垣根帝督の過去にはつらいことがあったと認識してもらえれば話は分かると思います。

暗部×暗闇×暗すぎる世界

「クソつたれが」

目の前に広がる死体。

別に暗部で仕事をしている人間にとって珍しいものじゃなかった。でも、あと少し敵が弱ければ、あと少し早く気づけば殺さずにすんだのに。

実際、今回も仲間は誰も死ななかった。

それでも人が死んだ。人が死ぬのは見たくないし殺したくもない。第二位という圧倒的な力があれば大抵のやつは殺さずに無力化できる。

それでも暗部は甘くない。LEVEL4とはいえ強いやつは強いし銃火器も学園都市のものは性能が良い。

この学園都市そのものを壊さない限り永遠と続く死や悲劇。いつか必ず壊してやる、そう決めたけど心が折れそうになる。

後何人死ぬのだろうか、俺の力が足りないせいで。

偽善かもしれない、人を殺しておいて助けたいなんて。

それでも俺は諦めるわけにはいかない。俺がやらなければ、もっと沢山の人が死ぬのだから。

仲間が一人死んだ。

敵は六人全滅、こちらは一人死んだ。

俺は間違っているのだろうか。

それでもアイツは言ってくれた。

『お前のおかげで死なずにすんだ奴がいる、絶対に忘れるなよ』
でもアイツは死んだ。

俺が敵を殺さなかったせいでアイツは死んだ。
俺が先に全員殺していれば六人。
俺殺さなかったせいで七人死んだ。

俺は決めた。

殺すことを躊躇わないと。

結果、多くの人を救えるなら殺す。

もう壊れているんだろう、俺の心は。
安い代償だ。

俺が殺すことで一人でも多くの人が救えるのなら。

昨日、第三位と戦闘をした。

勿論殺さないように手加減をしたが負けた。

まあ上層部の連中が揉み消すだろうから、どうでもいいか。

……本当は言ってやりたかった。

俺が手加減したら勝てないほどの力で何故人を助けない？

人体実験、暗部の闘争、多くの人が死んだり苦しんでいるのに。

勝手なことを言ってるのは分かっている。

世の中は理不尽だ。でも平和に生きる権利くらい主張させてやって欲しい。

ガラス玉ひとつ落とされたら追いかけても一ツッピ
電話が鳴った。

「仕事か？」

『ああ、そつだ』

電話の男は不機嫌そうに言った。

「内容は？」

どうせろくなもんじゃないんだ。

『第三位の殺害だ』

「おい！それは俺がしくじったからか！？」

『いや・・・別の案件だ、そちらの方は人違いということになっている。問題はない』

「そうか、分かった。単独で構わないな？」

『中途半端な奴では戦力にならないだろう、許可する』

「了解、すぐに向かう。場所は？」

また一人死ぬ。俺が無力だから。

暗部×暗闇×暗すぎる世界（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。
次回は蓮と帝督の話で、蓮視点です。
ではまた来週。

失望×希望×天照光（前書き）

地震もあって大幅に遅れました><

ある意味この話はここでスタートとなります^^
では、どうぞ〜

失望×希望×天照光

「人違い？」

第二位との戦闘の翌日、アンチスキル警備員の詰め所で黄泉川さんにそう告げられた。

勿論間近で見たわけだから、そんな訳ないのは分かっているけど。

「そういうことにして欲しいじゃん。それがお前の為だから」

いつもと違い、やたら真面目な顔で彼女は言った。

どうやら第二位は随分やばい身分らしい。アンチスキル警備員に圧力をかけられる程の。

「構いませんよ、無傷ですし」

まあ無理に聞き出そうとしてもこの人は絶対に話さないだろうし。

「神楽が強いのは知っている。でも知らないほうがいいことも世の中にはあるじゃんよ」

ちなみに今まで僕が検挙した能力者31名、一週間でね。

無能力者を無差別に襲っていた組織が三つもあるなんてねえ、世も末だね。

「分かってます、この件に関しては何も関与しません」

まあ関与したくても手掛かりないし。

「じゃあ風紀委員としての報告書は後で出すんで」

「了解じゃん」

僕はアンチスキル警備員の詰め所を出た。

そして並木道で第二位が突っ立っていた。

どうやら約束は守れそうにないな。

「おい顔を貸せ」

どうやら場所を移したいらしく、早歩きで路地裏に入って行った。

勿論付いていくと廃工場の中に入って行った。

中に入ると突然、

「悪いな、死んでもらう」

あの六枚羽が突風を纏い前回は遙かに越える速度で襲い掛かってきた。

手加減されてた訳か。

光の壁を展開するが一瞬で砕け散る。

二位と三位の差か………

周りのアスファルトが砕けて粉塵となる。

「すまねえ、俺にお前は救えなかった。俺の力の無さでな」

案外悪い奴では無いらしい。僕を殺そうとしたけど。

「殺せなかったの間違いでしょ」

粉塵は晴れてあっちもぼんやりと見えた。

目を見開いた顔は……イケメンは驚愕した顔まで格好いいな。あ、変な意味じゃなくて。

「……お前にあれは防げないはずだ」

「別にそっちだけ手加減していたわけじゃないでしょ」

「そういうこと言ってるんじゃないやねえ！あの攻撃は掛け値無しに最高の一撃だった。第三位であるお前に防げるわけがない！」

「ライト・ゲイザー光源収束、僕の能力名は、能力の本質を表してない、光操作の能力だよ。」

第三位つてのはライト・ゲイザー光源収束としての序列だしね。

ちなみに今のは光速を超える光、所謂タキオンを僕の体の回りに円運動させて熱で焼ききったって所かな。それに質量を上げまくれば、万有引力の問題はあるものの決して壊れない壁も作れなくないよ」

そこで第二位は黙り込んだ。

数十秒ほど経ってから口を開いた。

「何でだよ！なんでお前みたいな奴が風紀委員ジャッジメントにいるんだよ！それだけの力があればメインプランを崩せるかも知れないのに！」

「えっと話が見えないから説明を求む」

「なあ、俺とこの学園都市をぶち壊してくれないか？」

「断る」

この学園都市には当麻もインデックスも風紀委員の仲間もいるしね。

「……そうだよな。お前みたいな風紀委員（ヒーロー気取り）はそんな手荒な真似は出来ませんってか！」

再び六枚の羽が襲ってくる。

こんなに悲しそうな顔をして戦ってる人は見たことないな。

「僕はこの学園都市を壊せない。皆の幸せを守る為に風紀委員ジャッジメントのいなくなった訳だしね」

「皆の幸せ？大勢の命の犠牲の上にある幸せなんて本当の幸せなのか？」

「幸せなんてのは人それぞれだろ。大勢の命の方を救えば良いんじゃないかな？」

「そんなのは幻想だろ！実際何人死んでると思ってるんだ！」

「知らないさ！でも僕は全部救ってやる。今までをしようがないなんて言っつもりはない。」

全部背負ってやるさ、お前が今まで助けられなかった命も、これから助けられない命も。

お前の心に巢食う闇も、学園都市の闇も僕が消してやる」

「ははっ！お前が言うど実現出来そうな気がする、だがお前が首を突っ込もうとして居る世界は地獄の底だぞ」

「神楽 蓮、お前じゃなくて蓮だ。そしてお前は帝督でいいね？地獄の底なら尚更光の需要もあるだろうよ」

「神様にでも感謝しないと。俺は光を見つけられたらしい」

「とりあえず全部話して、帝督。そして何故僕の名前を呼ばない、空気読め」

「分かった。後戻りはできねえぞ、よろしくな蓮！」

闇に生きる超能力者と闇を照らす超能力者が交差するとき、新たな歯車が回り始める。

失望×希望×天照光（後書き）

次回は帝督視点でお送り致します。
ではまた来週^^

羨望×驚愕×一つの光（前書き）

割と早く出来たので投稿しました。
次は再来週になると思います><
では、どうぞ〜

羨望×驚愕×一つの光

第七学区の並木道

第三位の現在地と家への通り道。

並木道といっても、

周りはビルばかりの普通とは言えない並木道だが。

待つこと数分で第三位は姿を表した。

「おい顔を貸せ」

周りの連中といっても数人だが巻き込むわけにはいかない。

路地裏で予め決めてあった廃工場へと入る。

黙って第三位は付いてくる。

これから戦うのに人目がない方が良いのは同じか。

じゃあ苦しまないうちに死んでもらうか。

「悪いな、死んでもらう」

六枚の羽をあの時の数倍、確実に運動神経のレベルじゃ避けられず、あの光の壁の強度を超える力で放った。

案の定光の壁は一瞬で砕けて周りのアスファルトが砕けて宙を舞う。

「すまねえ、俺にお前は救えなかった。俺の力の無さでな」

何の理由があるかは知らないが暗部の仕事である以上、抵抗すれば死者が増える。

少なくとも俺の力じゃな。

「殺せなかったの間違いでしょ」

聞こえないはずの声が少し晴れてきた視界の奥から聞こえた。

「・・・お前にあれは防げないはずだ」

「別にそっただけ手加減していたわけじゃないでしょ」

「そういうこと言ってるんじゃないやねえ！あの攻撃は掛け値無しに最高

の一撃だった。第三位であるお前に防げるわけがない！」

「ライト・ゲイザー光源収束、僕の能力名は、能力の本質を表してない、光操作の能力だよ。」

第三位つてのはライト・ゲイザー光源収束としての序列だしね。

ちなみに今のは光速を超える光、所謂タキオンを僕の体の回りに円運動させて熱で焼ききったって所かな。

それに質量を上げまければ、万有引力の問題はあるものの決して壊れない壁も作れないよ」

第二位である俺の攻撃を実力で防いだ。

恐らくこいつの能力もこの世界の理からずれている。

おなじずれてる同士でこいつの方が強い。

何故だ、こんなヒーローみたいな能力、

俺みたいに中途半端でなくあの最強の右に並べるような奴がこんな所でのうのうと生きてるんだ！

間違っているのは分かってる。でもそれを間違っていると言い切れないだけの悲劇を俺は見てきた。

「何でだよ！なんでお前みたいな奴がジャッジメント風紀委員にいるんだよ！それだけの力があればメインプランを崩せるかも知れないのに！」

「えっと話が見えないから説明を求む」

口調はふざけているように取れなくもないが第三位の顔は異常なまでに真剣だった。

「なあ、俺とこの学園都市をぶち壊してくれないか？」

こいつならやってくれるかも知れないと思った。

「断る」

が期待は無駄だったらしい。

力はあるもただの腰拔だとこのときは思った。

「……そうだよな。お前みたいな風紀委員（ヒーロー気取り）はそんな手荒な真似は出来ませんか！」

無駄だと本能的にも知りつつ六枚の羽をありつただけの力でぶつ放す。
「僕はこの学園都市を壊せない。皆の幸せを守る為に風紀委員シヤッジメントのい
なつた訳だしね」

「皆の幸せ？大勢の命の犠牲の上にある幸せなんて本当の幸せなの
か？」

「幸せなんてのは人それぞれだろ。大勢の命の方を救えば良いんじ
やないかな？」

「そんなのは幻想だろ！実際何人死んでると思ってるんだ！」

この後の言葉は生涯忘れることはないつても大げさじゃなかった。

「知らないさ！でも僕は全部救ってやる。今までをしようがないな
んて言うつもりはない。」

全部背負ってやるさ、お前が今まで助けられなかった命も、これか
ら助けられない命も。お前の心に巢食う闇も、学園都市の闇も僕が
消してやる」

こいつは紛れもないヒーローだった。

俺みたいな中途半端で血まみれのヒーローじゃなくて、
力を持ち全ての人の幸せを守りたいと戦う奴だった。

理不尽だと思わなくもない。もし俺がこいつ程の力を持っていれば
何て意味のないことも思う。

でも関係ない。これから一人でも死ぬ奴が減っていくならそれが何
より俺の願いだったから。

「ははっ！お前が言うど実現出来そうなのがする、だがお前が首を
突っ込もうとしている世界は地獄の底だぞ」

久々に心から笑った気がする。

答えの分かっている質問を投げかけた。

「神楽 蓮、お前じゃなくて蓮だ。そしてお前は帝督でいいね？地
獄の底なら尚更光の需要もあるだろうよ」

「神様にでも感謝しないとな。俺は光を見つけれたらしい」

冗談でなく本気でこんなこと言つとわな。

「とりあえず全部話して、帝督。そして何故僕の名前を呼ばない、空気読め」

とりあえず説明の前に一言。

「分かった。後戻りはできねえぞ、よろしくな蓮！」

今まで殺した多くの人々の命を背負って悲劇を潰してやる。
壊れかけた心の隙間が少しだけ埋まったような気がした。

羨望×驚愕×一つの光（後書き）

次回は主人公会談？です。

また再来週^^

会談×二人×壁に耳あり？（前書き）

お待たせしました><

今回は二人が話してるだけのお話なんで誰が話してるか分からなかったら申し訳ないです。ではどうぞ〜

会談×二人×壁に耳あり？

「とりあえずこの工場を出たら俺は任務失敗ということにしないと襲われるんでここで話すな」

「オーケー」

「この学園都市は様々な思惑を持った数人〜数十人の暗部組織が無数にある」

共通して言えるのは皆人を殺すことを前提に戦っていることと、裏幕がいて皆学園都市の権力者だと思っ**て**いい」

「暗部組織か・・・帝督もその内の一つに所属してるんだよね」

「ああ、俺はスクールってところに所属している」

「構成員は？」

「基本は俺と心理定規^{メジャーハート}って女で追加で必要な人材を雇ってる。心理定規は協力してくれる人員に数えてくれ」

「彼女？」

「そんなんじゃないやねえ、本題に入ろう」

「僕は事情を知らないから僕なりのやり方で聞くよ。帝督は僕って**い**う駒があるとしてどう使う？」

「お前が第一位とやり合えるかどうかによるが、

勝てるならまず第一位を潰す。そうすれば俺達は総統括理事長との独占交渉権を得られる。

総統括理事長、アレイスター・クロウリーって奴は暗部組織を全部解体できるだけの力があるからな」

「潰すつてのは殺すではない？」

「殺さなくても能力を使用出来ない状態に出来れば・・・いや殺すしかないな。お前と第一位にそんな実力差があるとは思えない」

「ちゃんと計画した上での戦闘では実力といっても色々な物差しがあるんだよ」

「そんなことは分かってるが、あれ位の能力者だと細かい作戦なんか吹っ飛ばしてくれるだろうよ。まあ俺やお前にも適用するが」

「それは勝利条件が互いに対の場合でしょ？僕らは一方通行の能力、つまり演算能力を奪えばいい」

「演算は脳でやるんだぞ、脳の演算に使用される部位だけ打ち抜くなんてのは無茶だ、大体第一位の能力は」

「ベクトル変換でしょ、書庫バンクで見た。あれは厄介だけど例えばAI Mジャマーで無力化して監禁するとかは？」

「流石にAI Mジャマーは用意できない。あれは固定型だからな」

「じゃあ僕か帝督の常識外の力は通るかな？」

「それは俺も考えた。悪くはないが確証はないから実行してないし、

自分だけの現実の拡張っていう可能性があるから多発も無理だ」

バーンナル・リアリティ

「一発で頭打ち抜けば・・・だめだ、多分死ぬね」

「なあ第一位、一人いなければ平和になるんだ、この際犠牲に
つてのは仕方ないことなんじゃないか？」

「もしこの現状を作っているのが第一位ってなら、ありえる選
択肢だよ。別に脳打ち抜いて絶対死ぬとは限らないし」

「だが実際この現状を打破するにはそれしかないと思っ
つ」

「第一位は学生だったよね？」

「そうだ。それと、暗部のメンバーには入ってねえ」

「そっいえば独立交渉権ってのはどういうものなの？」

「総統括理事長の目的、の第一候補メインプランが第一位、第二候補サブプランが俺だ。
その計画の成就に不可欠な立場なら対等に交渉が出来るってこと。
例えるなら、スポーツのスタメンは監督に練習内容とかの交渉は出
来るが、補欠じゃあ厳しいってことだ」

「なら第一位に交渉の場に立ってもらえば良いんじゃない？」

「直接第一位のことは知らないが多分無理だ。」

「そっいう奴じゃない。アイツが今やっている実験、絶対能力進化（
レベル6シフト）ってのは細かい内容は必要なら後で話すが、
2万人のクローン体を殺してLEVEL5からLEVEL6になり
ましょうって計画だ」

「二万・・・そんなことが学園都市で普通に行われてるのか」

「よって無理だ、交渉なんか出来る奴じゃない」

「いや、あくまで勘だけどいけるかも知れない」

「どういうことだ？」

「推論だけど、普通に考えて二万人もの人間を殺せるか？」

「それは俺に対する嫌味か？まあ普通は無理だろ」

「普通じゃない理由、それは何かの事情か、第一位の精神が異常か。僕は前者だと思う、勘だけど」

「まあいい、話してくれ」

「第一位には事情がある。そして普通の考えで二万の命の対価に見合うものは少ない。

大切な人や・・・それ以上のひとを殺さないためとかね」

「要するに後者なら俺らと目的は同じ。前者なら大切な人の保護か」

「後者の場合は考えるまでもなく共闘できるはず、ただ第一位が本当に敵わない相手だと厄介だけど、そうじゃなくて殻に籠ってるだけだと思う」

前者は大切な人の保護・・・場合によっちゃ殺すと脅してもいい」

「いいのかよ？」

「人攫いで、人殺し回避出来るなら安すぎる」

「お前、ジャツジメント風紀委員だろ」

「気にしない、あとこれからの動きでジャツジメント風紀委員は条件がいい。
治安維持で暗部組織壊滅させてもお咎めは少ないと思う。なんだか
んだで第三位だからうやむやになって辞めさせられるってことはな
いと思う」

「じゃあ基本方針は第一位と接触し交渉、最悪の場合無力化し拉致
つてとこか」

「それで行こう、この件が終わるまでは帝督は任務失敗で、僕は自
分で帝督を倒せると思い込んでアンチスキル警備員に通報しないって設定で」

「メジャーハート心理定規にもそう伝える」

「じゃあ帝督が飛び出した後、時間差で僕が追いかけて逆方向に追
うってことでいい?」

「分かった、俺は右に行くな」

「僕は左ね連絡はどうする?」

「携帯壊れてないか?大丈夫ならアドレス見せる」

「オーケー」

「よし覚えた、じゃあそこに集合場所と第一位に関するデータを送

る」

「じゃあ、また後日」

「ああ、じゃあな。数日後には連絡入れるからな」

面白い、やはりこうでなくては人生は面白くない。

第二位と第三位の結託は全くプランに想定されていなかったが、問題は無い。

想定しなくてもいい程プランにとっては小さな事だ。

とあるビルで今日も科学者は思考を続ける。

会談×一人×壁に耳あり？（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます^^
ではまた来週

光×ヒーロー×眩しい友達（前書き）

今回は上条さんが久しぶりに登場します。

あと学校が明日から始まるので暫くは月2回程度の更新速度になります。

学校に慣れてきたらもう少し上げていきたいと思えます。

では、どうぞ〜

光×ヒーロー×眩しい友達

「実際僕は、何人か不良から女の子を守ったり、インデックスの件でも戦ったけどさ」

お前の心に巣食う闇も、学園都市の闇も僕が消してやる、か・・・
何故僕はあんなに強くいられるんだろう。
怖くないわけ無いのに。逃げ出したくてたまらないのに。

「僕は何のために戦っているのかな？」

記憶を無くしたのに、どうしたら良いか分からなくて迷っているのに、誰かが困っていると助けたくなる。

自分のことさえ分からないのに他人助けたいと強く思うのかな？」

「別におかしなことじゃないと思うぜ。困っている人がいたら助けたい、

俺もそう思うし、もしその為に戦わなければいけないなら戦うぜ。

でも急にどうしたんでせうか？こんな時間に電話掛けてさ」

「たいした事じゃないよ？ただ風紀委員ジャッジメントに成り行きでなっちゃって少し迷ってた」

嘘だ。友達に嘘はつきたくないけど、間違はなく当麻は話せば力を貸してくれちゃうんだろうな。

三沢塾ってところで魔術師と戦ってたらしいし、僕に内緒で。

「嘘だろ？」

心臓が止まるかと思った。

当麻はカマを掛けて来る様なやつじゃない。どこでバレた？

「俺は困ってる人がいたら助けるって言っただろ？」

なんか眩しいなあ。僕のように何となくでなく、真っ直ぐで強い本物のヒーローだ。

「でも、その困っている人は当麻の知らない人だよ」

だからこそ、本物のヒーローの手を煩わせちゃいけないんだ。

「おい、俺が言ってるのはお前だよ蓮。蓮が困ってるだろ？十分俺が戦う理由になる」

「ごめん、でも当麻は関わっちゃいけない。それこそ地獄の底まで行く事になるよ？それも一方通行の」

正直、今すぐ助けてと言いたい。

僕と帝督ともう一人で背負うには大きすぎる戦いになるだろう。

「関係ねえよ」

それでも駄目だ。

「周りの人に危害が加わる可能性もあるよ」

「っ！・・・だからってお前」

「大丈夫だよ！僕一人って訳じゃないし」

これは事実。きっと三人でも上手くいくはずなんだ。

例えばどんなに強くても負けるようなメンバーではない。

第二位と第三位は伊達や酔狂で決まってるわけじゃないから。でも当麻は僕が思っているより強かった。

実際の戦闘能力では周りのレベル0の人間よりかは強い。

でも、高位能力者が揃いに揃って負けるほどではないはずだ。

「・・・聞けよ蓮。だからってお前を助けなくて良い理由にはなんねえだろ。」

それにこの話をしたってことはお前が困ってるってことだろ。

もしお前が俺を巻き込むことを迷惑だと想っているならまずは、その幻想をぶち殺す」

ここで折れれば当麻は闇の世界に足を突っ込むことになってしまう。一度入れば完全な勝利を得ない限り出られない、地獄の底に。

「俺を不幸にさせないでくれよ。何も知らないまま仲間が傷つくのは見たくない。」

俺に何か出来る事があるなら、何でもやるぜ」
後ろから声がした。

「どうして・・・ここが？」

第8学区のとある公園。

別に意味があつてきたわけじゃないんだけど。

「ビリビリっじゃなくて電気系統の能力者に頼んでお前の携帯の電波から探したんだぜ？全く心配掛けるなよな。それとお前ん家壊れたんだろ？俺の部屋に来いよ」

眩しすぎるけど、僕も当麻の隣なら誰かを照らせるような気がした。甘えかもしれないけど、それで誰かの為に戦えるならそれでもいい。と言う訳で一応寢床は用意されてるけど、お言葉に甘えますか。

それに僕が守れば良いだけだ。

当麻と当麻の周りの世界をね。

「分かった、行かせて貰うよ。でも学園都市に喧嘩売らなきゃならないかもよ？」

「何度も言わせるなつて。上条さんはそんなこと気にしませんよ」

二人の全く違う様で似ているヒーローと学園都市の闇、

世界の闇が交差するとき運命は誰にも予想できない方向へと転がります。

光×ヒーロー×眩しい友達（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます^^
次回はあの最強（笑）が出てくる予定です。
ではまた再来週くらいにノシ

衝突×決着×暗部の掃除屋（前書き）

学校始まって全然時間がないです><

今回の話は後でもうちよつと細かく書き直すかもです。

それだけでないですがいままで以上に亀更新になるかもしれない
がご了承ください。

では、どうぞ〜

衝突×決着×暗部の掃除屋

「何の真似だア、三下どもが」

「T字になっっている路地裏の真ん中で学園都市最強の能力者、一方通行イクタが口を開いた。

「三下ね。そこまで格下じゃないけど？」

蓮は第三位のクローン体、妹達シスターズ10020号を抱きかかえる。

「そうだけ、第二位、第四位まで揃えてきてやったんだぜ。そろそろ天辺から引き摺り下ろしてやるよ！」

帝督は逃げ道を塞ぐように反対に立ちほだかる。

「お前自分が何をしているか分かってんのか！」

無能力者も第一位の逃げ道を塞ぐように立つ。

「くつだらねエ、そろそろと出て来やがってなア！」

「あんまりふざけないでよね。くだらない？人の命をくだらないとは何事だ！」

蓮は自分が手を出してはいけないことにもどかしさを覚えるがここまで来てチャラにするわけにはいかないので堪える。

「くだらねエことにくだらねエといって何が悪い、ただの実験動物のためにわざわざ」
一方通行アクセラレータが言い切る前に帝督がキレる。

「おい！人の命をなんだと思ってやがる！てめえの様な奴が生きていて、なんで無力な人間が死ななけりやなんねえんだよ！」

「帝督！僕だつて我慢してるんだ、手は出すな」

「分かってるさ。上条！俺の分も任せな」

そうここで上条当麻以外の人間が手を出しては全て意味のない事になるのだ。

「ああ、分かってるさ」

当麻がいつにも増して怒りゆえの無表情で答える。

「ふざけてんのかア？お前みてエな文字通りの三下だけが戦うだと？」

一方通行は地面を蹴って周りの小石を音速ほどの速さで飛ばすが、それは蓮の作った見えない壁（普段はイメージしやすいように色を付けているが今回は二人は手をださないことになっているので無色透明）に阻まれる。

そこで考えが纏まったのか10020号が口を挟む。

「何故です！替えのきかない貴方が替えのきくミサカの」

「んなこたあどうでもいいんだよ！俺はお前たちに生きてて欲しいんだよ！だから黙って助けられてろ」

「おい三下ア、その程度防いだくらいで調子こいてんじゃねエ」

上条当麻は短気ではない。

だが自分に近い人物の危機に関しては絶対に助けたいと、

例え命を掛けても助けたいという芯があるからこそ許せなかった。

「妹達^{シスターズ}だって生きてるんだぞ！それをお前みたいな奴が殺していいわけがないだろ！

なんでこんなことができんだよ・・・もしもお前が本気でそれを間違っていないって言うなら、その幻想をぶち殺す！」

当麻は一方通行^{アクセラレータ}の前に踏み込む。

「な！」

一方通行^{アクセラレータ}の体は動かない。

それは恐怖でもなく、物理的に拘束されていた。

実際は未元物質を不可視にしたものに拘束されていたわけだが。

学園都市の最強はレベル0の無能力者に一発KOされた。

その映像は学園都市のネット経由で広まった。総統括理事会はその場に第二位と第三位がいたことを知っていたが何より衛星に映っていなかったので物的な証拠もなく、そして更に一通のメールが目安箱（総統括理事会への要望のためのものの呼称）に送られてちよつとしたパニックになった。その結果レベル6計画は無期限凍結でなく、完全な中止となり、約一万ものクローン体の殆どは世界各国の学園都市に協力している研究施設に送られるが、それはまた別の話。

そのメールにはこう書かれていた。

学園都市総統括理事会の皆さんへ

学園都市の最強は僕たちに負けました。そこで正式に交渉をしたいと思えます。まずレベル6シフトの中止。

それと僕らが今後学園都市の闇をどう料理しても見て見ぬふりをする事。

以上です。

守れなかった場合はクーデターとかを起こします。

暗部の掃除屋兼風紀委員対能力者特別部隊「レスキュー」

神楽蓮

垣根帝督

上条当麻

心理定規（仮名）

それと

御坂美琴とその妹達^{いもつとたち}

衝突×決着×暗部の掃除屋（後書き）

意外とあっさり決着を付けてしまいました。が、

一方通行にとつても蓮たちにとつてもここは通過点なので敢えて細かい事は考えずに書きました。

それにしても戦闘描写って難しいですねえ。

また禁書読み直して勉強します。

では、また2、3週間後にノシ

前兆×結束×嵐の前のなんとやら（前書き）

ー昨日第一部のエピローグを載せましたが、更新になるのはここからみたいです。今回は少し短いですが、どうぞー

前兆×結束×嵐の前のなんとやら

「風紀委員ジャッジメント対能力者特別部隊なんて俺たち風紀委員ジャッジメントですらなかったのによくなれたよな？」

第7学区の個室サロンで当麻が質問を投げかけた。

「第二位と第四位の連名で頼んだからね、断りようが無いし、風紀委員ジャッジメントからしても貴重すぎる戦力だよ」

「そして暗部の連中に大っぴらに能力を行使できるし、現行犯逮捕まで許可されるた訳か。てかお前今日はドレスじゃないんだな？」

「悪いかしら？私は参加したくないと言ったのに無理やりやらされて、服装にまで文句付けらんなくちゃいけないの？」

頬を膨らませて拗ねた顔をする心理定規は白のワンピースメジャーハートを着ていた。

「いやいや、そのワンピースも似合っていると上条さんは思いますよ」

「あら優しいのね、どこかのメルヘンと違って」

「んだとコラ、喧嘩売ってんのか耳年増が」

「そこ喧嘩しない、そもそも暗部に狙われる心配がない訳じゃないんだからね、まあ総統括理事会の直轄の方は手を出せないとは思っけど」

あくまで推測だけどねと蓮は付け加えた。

実際、すぐに襲われる可能性は、今回の作戦の結果から見て零に等しいが用心に越したことはない。

「だが本当に良かったのか？第一位に交渉しないで少々不満そうな帝督がばやく。」

「最初にも言ったはずだよ、一回聞いて駄目だったら交渉は諦めるつて。一度勝ったからって、今後第一位を敵に回すのは避けたいからね」

「仕方ないか・・・じゃ後は俺と蓮が能力行使で暗部の連中を潰す

ただだな」

「あの〜上条さんは無能力者なんであんまり派手な戦いだと死ぬ気が・・・それに暴力で解決すればいいってもんなのか？」

蓮はおもいつきりぶん殴っておいて今更かよと内心突っ込んだが、これには心理定規メジャーハートが答えた。

「優しいだけじゃ救えないものもあるのよ、まあさんざん人殺してきた人間の戯言だけどね」

少しの沈黙に部屋が包まれたが考えをまとめた蓮がそれを破る。

「とりあえず、当麻は銃器が飛び交う暗部交戦では危なっかしいから表向きの風紀委員ジャッジメントとしての行動を主に頼むね」

「いやお前らだけに危ない役目を押し付けるってのはさあ」

「当麻だけが危ないんだって。僕と帝督は対物ライフルくらっても無傷、心理定規は大抵の連中の敵意を消せるしね」メジャーハート

「まあ、そういうことだな。俺たちが暗部とやってる時、隠れ蓑の風紀委員としての仕事をやる人員がへるからな」ジャッジメント

「私は表の方がいいわ、というよりそっちのお二人さんが暴れるのに巻き込まれたら生きて帰る自信ないもの」

「じゃ当面は僕と帝督が暗部への牽制、当麻と心理定規メジャーハートが高位能力者の相手をするってことで。」

風紀委員の方は警備員アンチスケルから通報が来た時以外は基本的に何も無いけど暗部の中でもヤバイ連中と戦うときは援護頼むね」パーソナルリリテイ

「了解、俺は自分だけの現実の調整あるから一旦アジトに戻ってるな」

「私も今日は疲れたし、帰るわね」

「げ！スーパーのタイムセールまで後一五分かよ、不幸だああ！」
そう言つて三者共に部屋を出る。

「さて僕も帰るか」

出遅れた蓮は独り言を呟き個室サロンを後にする。

蓮たちは気づかなかった。

個室サロンを出たところを四人の暗部組織の人間に見られていたことを。

「へえアイツらが暗部全体に喧嘩売った馬鹿共ね。見た目は雑魚じやない」

「結局、堅気の連中って訳ね」

「何私たちが超暴力団みたいに言ってるんですか？それに半分はスクールの連中ですからね超油断できないですよ」

「北北東から信号が来てる」

前兆×結束×嵐の前のなんとやら（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。ごさいました。
また後日〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638p/>

とある転生の光源収束（Light Gather）

2011年10月7日17時01分発行